

標 題： The Diet and 15-year Death Rate in the Seven Countries Study
7カ国研究における食事と15年間の死亡率

著 者： A. Keys, et al. (米国 ミネソタ大学 医学部 疫学科)

掲 載 誌： Am. J. Epidemiol. 124: 903-915 (1986)

要 旨： 40～59歳で開始時に「健康」な男性11,579人から構成される7カ国研究の15コホートで、15年間に2,288人が死亡した。死亡率はコホート間で異なった。

平均年齢、血圧、血清コレステロール、および喫煙習慣の相違が、総死亡率の相違の46%、冠状動脈性心疾患による死亡率の80%、癌による死亡率の35%、および脳卒中による死亡率の45%を「説明」した。

死亡率の相違は、平均相対体重、肥満および運動のコホート相違と関連しなかった。

コホートは平均的な食事が異なった。

死亡率は、飽和脂肪酸由来食事エネルギーの平均パーセント値と正の関連をし、1価不飽和脂肪酸由来食事エネルギーのパーセント値と負の関連をしたが、多価不飽和脂肪酸、タンパク質、炭水化物、およびアルコール由来食事エネルギーのパーセント値とは関連がなかった。

総死亡率は、1価不飽和と飽和との脂肪酸比と負の関連をした。

その比率に、年齢、血圧、血清コレステロールおよび喫煙習慣を独立変数として加えると、総死亡率の相違の85%、冠状動脈性心疾患による死亡率の96%、癌による死亡率の55%、および脳卒中による死亡率の66%を説明した。

コホート間の1価不飽和脂肪酸のほぼ全ての相違を、オレイン酸が説明した

オリーブ油が主な油脂であるコホートで、総死亡率および冠状動脈性心疾患による死亡率は低かった。

リスクを評価するにあたって、因果関係を主張しないが、住民および住人中の個々人の特徴を主張する。

冠状動脈疾患、死亡率、腫瘍、オレイン酸、住民
